

---

# Reset

星谷 哲奈（元くろひつじ）

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

R e s e t

### 【Nコード】

N 6 2 3 1 V

### 【作者名】

星谷 哲奈（元くろひつじ）

### 【あらすじ】

ある日均衡を破って地上へ訪れた悪魔は、悪魔の名を呼ぶ不思議な天使と出会うのだが……。ダークファンタジー。

地上へ——そしてレリギオンを——

大地の割れ目から地上に這い出た悪魔を、泣きたくなくなるほど青い空が出迎える。これから自分が何をすべきなのか、悪魔は何故か分かっていた。

厚い雲が太陽を覆い隠し、下界は影になる。はるかな地平線がどこまでも続いていた。

悪魔は背中から生えた一對の蝙蝠の羽を開くと、空へ一気に飛翔した。大きな蝙蝠の羽が上下に動くたくましい音と共に、みるみる地上が点になり、悪魔の見事な黒髪が風に吹かれて舞った。

『奴隷ふぜいが、飼われてる分際で口ごたえするな——！』

『どうして私だけが。人間は平等じゃなかったの！？』

『許さない。俺が何もかも奪い尽くしてやる——！』

『無関心でいたいんだ』

『もつと、もつと光を——！』

『おかしいわ。さつき食べたばかりなのにちつとも満足できないの』

『あなた以外、何もいらない』

悪魔は一瞬で世界中で行われている罪を感じ取り、口元を酷薄に歪めた。

初めて訪れた地上は、悪魔の大好きな澱んだ感情で覆われている。これから、愚かな人間をどう弄び、糧にしてやるうか。

そう考えた矢先、悪魔の頭上から目のくらむような神々しい光が降ってきた。先ほどから太陽を覆っていた厚い雲が一気に晴れる。

悪魔は一瞬眩しさに目を細めたが、戸惑うことなく光の主を探した。悪魔の目に映ったのは、頭上に抱く金輪と、対の白い大きな鳥の翼を持つ、美しい天使だった。

「アウレリウス……ここを去りなさい。ここはあなたがいて良い場所ではない。あるべきところに還りなさい」

天使の男とも女ともとれる声は心地よく響き、人間が聞けば心が洗われるように尊かった。しかし悪魔はそれをただ耳障りなものとしか感じなかった。

「邪魔をするな。それに、勝手に決めた名で俺を呼ぶんじゃない」  
名前なんて、悪魔はいらなかった。名前で自分の存在を定義され、何者にも支配されたくはない。それなのに今会ったばかりのこの天使は、無礼にも悪魔をアウレリウスと呼ぶ。

苛立った悪魔は、指先からどす黒煙を天使めがけて勢いよく噴き出し、天使を覆い隠した。しかし突如天使が真つ白に光ったかと思うと、黒煙は跡形も消え、代わりに白く細い煙が天へゆらゆらと昇っていった。悪魔はそれを見て悔しそうに舌打ちをした。

「もう一度言う。ここを去りなさい」

天使は美しい顔の表情を変えずに淡々と言った。

「嫌だね。そうやって取り澄ましたところも含めて、俺はお前の全てが気に入らない。大体今の俺を襲えば地獄へ落とすことが出来るはずなのに、そうしないでおくことで情けをかけたつもりなのか」

「……地獄へ落としたところで、きっとあなたは均衡を破るためにまた上ってくるだけでしょう」

「フ……確かにそうだ。定め通りになー!!」

そう叫んだ悪魔は、天使を引き裂こうと飛びかかった。しかしその前に天使の指先から出た白い雷が、鼓膜が破けそうな凄まじい音と共に悪魔の体に落ちた。

「ふん……偽善者め……忘れるな……どうあがいてもその日は近い。今はどうにか人間どもが踏みとどまっているが、やがて均衡が破られる日がやってくる。突き進んでいくだけで。誰も止められはしない」

体中に電流がばちばちと走った悪魔は呪詛を残し、元いた大地の割れ目の中へと真つ逆さまに落ちていった。

「アウレリウス……私はあなたを……」

穏やかだった天上の気は、悪魔の来訪で乱されていた。まるで天

使の心のように。

無情にも、運命の歯車は悪魔の予言通りに回る。

月日が経ち、着々と力をつけていた悪魔は地上に這い上がると、向かってきた天使を襲った。

天使は応戦したが、悪魔の以前とは違う圧倒的な力にいたぶられ、逃げることも叶わず傷だらけになって大地に倒れた。

悪魔は虫の息の天使に覆いかぶさり、口腔を抉るように接吻した。体に力が入らない天使はされるがままだ。

「まずい」

悪魔は自分の唇を手でおざなりに拭い、うつそうと笑ってから、天使の下肢を割り開いた。それは快樂のためではなく、ただ傷つけるためのものだった。

悪魔にとっては狂宴、天使にとっては地獄のようなそれが終ると、悪魔はたちまち退屈さに襲われた。

憎むべき天使はもはや反抗の気概を見せず、横たわっている。

こうなってしまったらつまらない。殺してしまえば、少しは楽しめるだろうか……

悪魔が戯れに伸ばした手が、天使の白くやわらかな首に爪を突き立てながら回される。天使の眉が苦しげに寄せられる。

「……アウレリウス…… 私たちが初めて出会った時のことを覚えていますか」

「ああ覚えているとも。今と変わらないお前の憎らしい面と物言いを」

思いも寄らない天使の言葉に悪魔は少し驚きながら、それでも天使の首を絞める指を緩めない。

「……私は……生まれて初めて……誰かを愛したいと思った」

「？ 何を言っている」

悪魔は愛の意味を知らない。ただそういう概念が人間にあること

は知っていたが、無益なものばかりだと思っていた。

「何故なのかは分からない……でも、それまでただ定めに従って生きるだけの人形だった私は……生きた熱塊へと生まれ変わった――  
――あなたに出会ったあの日から――」

「……名付けることは生かすこと……私はあなたに生きてもらいたかった……そして、名付けられたかった……」

その言葉の意味を理解した悪魔の目が見開かれる。

「黙れ！！ 天使が悪魔に何かを望むとはおぞましい……このまま消えてしまえ！！！」

悪魔は手に力を入れようとした。しかし、いくら試しても、できなかった。

「何故だ！？」

悪魔は言うことを聞かない自分の身体に戸惑い、苛立った。

「……アウレリウス……？」

何だ、これは。

今アウレリウスと呼ばれた時、全身を支配しようとしたこの安らかな気持ちは……

「クソッ！！」

悪魔は拳を大地に叩きつけた。

「アウレリウス。私の名前を呼んで……」

そう、お前の名は……

刹那、世界は真っ白になる。

二人の憎しみも、想いも、何もかも消し去って……

地上へ――そしてレリギオンを――

大地の割れ目から地上に這い出た悪魔を、泣きたくなるほど青い空が出迎える。これから自分が何をすべきなのか、悪魔は何故か分かっていた。

厚い雲が太陽を隠し、下界は影になる。はるかな地平線がどこまでも続いていた。

（後書き）

最後まで読んでくださってありがとうございました！

<http://akina8.web.fc2.com/>（作者の  
サイト）

よろしかったら遊びにきてください

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6231v/>

---

Reset

2011年8月18日03時18分発行